



卓 話



「野球と人生」 元ヤクルト投手・評論家 松岡 弘氏

人間は生まれながらにして人生が決まっていると言われま
す。しかし、自分の「努力」や
思わぬ「運」を掴むことで、人
生が変わります。毎日の生活



(仕事)の中で目標を達成する為の準備を常にやっ
ておけば、「運」は自ずとついてきます。

私がプロ野球に身を投じて18年間第一線で活躍で
きたのも、他の素晴らしいバッターとの戦いの中
で、日々研究と工夫を繰り返してきた賜物と思っ
ております。

ピッチャーとバッターの18メートル余りの距離の
間で、凄まじい戦いがあるのです。一言で言えば
「相手を騙す」技術を身につけることです。

私はプロ野球に入って2年間は鳴かず飛ばずでした
が、その時自分がどんな投手になるのか明確な方向
性をもってなかったことに気づきました。そこで自
分はコントロールで勝負するのではなく、速球で勝
負する投手になるんだと、はっきり方向性を決めた
のです。

それからはバッターに対し、必ず速球を相手にぶ
つけました(デッドボール)。これがピッチャー松
岡のイメージを相手に植え付けることになり、相手
から見ると速球をぶつけてくる怖いピッチャーと
なって、直球・シュート・カーブのコンビネーシ
ョンでエースの座を奪ったのです。もちろん、相手
に意識をさせる為のデッドボールですから、頭を目
掛けては絶対に投げません。当時私の急速は157~8km
はあったでしょう。頭に当たれば死にますし、凶器

になります。

ところで当時ぶつけた相手バッターのうち、二人
だけぶつけた私に謝った人がいます。それは現ヤク
ルト監督の高田繁氏と、鉄人衣笠幸雄(当時広島
カープ)です。高田監督は「逃げるの下手で悪い
ね!」と言いながら一塁ベースへ。衣笠幸雄は「イ
ンコースに投げていいよ!」と私に向かって言っ
て、投げると打席から逃げずに、当たって一言「悪
いね!」と。ピッチャーとバッターの関係は、ご存
知の通り3割打つとバッターが勝ちです。投手は7割
抑えても負けです。従って終身打率が3割以上の選手
は素晴らしいバッターと言えます。

一方、絶対ぶつけられなかった人がいます。巨人
軍の王さん、長島さんです。当時の二人は球界でも
別格で、言ってみれば国民的英雄でありました。そ
んな人にぶつけることは出来ませんでした。その結
果二人には3割5分以上打たれております。

今年の日本シリーズ巨人対西武は、お互いのチー
ムの特徴が現れた結果に終わったと思います。ゴル
フに例えるなら、巨人がドライバーチーム、西武が
アイアンチーム、その結果、西武が勝った訳です。

私の高校の先輩でもある星野ジャパンについて
は、オリンピック委員会の直前での野球ルールの改
正が影響したと思います。日本の野球機構が講義も
せずあっさり認めてしまうなど、後押ししてくれ
るべき人達がそうではなかったとの思いが、星野監
督はじめ首脳陣に感染してしまった為です。WBC大会
に於いてはそのようなことの無いよう、一致団結し
て優勝を目指して欲しいと思いますし、監督、コー
チをはじめとして良い人選がされていると思いま
す。

最後に、私が常に心掛けていることは二つです。
一つは感謝の心を持つこと。二つ目は健康な身体で
いることです。

以上、本日はありがとうございました。